

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	靴
Author(s)	田代, 三智麿
Citation	龍南, 175: 47-68
Issue date	1920-06-10
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/6980
Right	

靴

田代美智麿

「もうやがて春になるのだ。柳の若芽が伸びる頃には俺も愈々卒業するの……」さう思ふと啓造の胸は自ら躍り上つた。中學五年間の生活は色々な意味で、彼にとつては慘^{みじか}なものであつた。現實から見れば何時も美しく懐しく見える筈の既往の生活から、彼は何一つとして快い印象を享受する事は出来なかつた。「中學さへ卒業したら……」實生活の苦惱の悶^もんで居る人々が、せめて來世の幸福を希ふやうに、啓造は苦難に出會ふ度毎に、かう叫んで沈みゆく自分の心を慰藉し鞭撻した。かうした場合、彼は中學さへ出たら、今迄の不幸と似もつかぬ幸運が自分を待つてゐるやうに思はれてならなかつた。それは漠然として居て明確に捕捉し難いものではあつたが、兎に角、自分の未來を想ふ時には何時も、全身が云ひ知れぬ感激に打ち慄へるのであつた。

「愈々卒業するのだ……」啓造はも一度心に叫んだ。「卒業したら——さうだ、内地のやうな狭苦しい所に齧^齧て居ても駄目だ。ひと思ひに、南米に飛び出して真面目に働かう……」啓造は今朝受取つたばかりの手紙を衣囊^{ポケット}の中で握り締めた。それはブラジルで珈琲の栽培に従事してゐる綾部から來たものであつた。彼はその中の魅惑に満ちた文字を想ひ浮べて、未知の國を様々に描きながら夢のやうな歩容を、ゆるやかに運ん

で行つた。

啓造が學校の前の大通りに出た時、厳しい軍服を着けた体操教師が元氣よく歩いて來た。彼はその姿を認ると、一兵卒のやうに端然と姿勢を正して舉手の禮をした。体操教師は型の如く手を舉げて返禮をしたが、手を元の位置に返すか返さないうちに、啓造の全身に鋭い視線を投げかけた、そして、その視線は彼の足許に達した時にピツタリ止つた。啓造は一寸異様に感じたが別段氣にもかけずに、また、甘い空想を續けながら歩いた。

「やあ、高津お早う……」啓造が校門に通じた坂路を、下駄を引きすりながら登つてゐると、同じ級の岡本が後から元氣のいい聲を浴せかけた。

「やあ、お早う」と、啓造は深い幻想から甦つて鸚鵡返しに云つた。

「おい君、その下駄は一体どうしたい？今日は合併体操があるんたよ」岡本は啓造の杉下駄を指しながら囁鳴るやうに云つた。

「何ッ？合併体操？」啓造は不意に冷水を浴せかけられたやうに立ち竦んだ。「そいつは困つたなあー」

「君の呑氣さ加減には全く呆れるよ。昨日、あれだけ級主任から注意されたぢやないか？」

「いや、全くうっかりしてゐた——さうだつたらなあ……」啓造は忌々しさうに杉下駄を地面に踏みつけた。

「所で、君はどうする積かい？その下駄ちや仕方は無いね」岡本は嘲るやうな、憐れむやうな口調でかう訊いた。

「いつそのこと、歸らう……」と、啓造は吐き出すやうに云ひかけたが、此の時ふと、先刻會つた体操教師の鋭い異様な眸を想ひ出して、口を噤んでしまつた。

「歸らなくつてもいいよ。寄宿舎の生徒にでも頼んだらどうにかなるだらう、」啓造の暗い顔を見て、岡本は氣の毒さうに慰めた。啓造は、これに一縷の力を得て校舎の方に重い足を引きすつて行つた。

啓造の中學では、毎月一回合併体操が行はれた。その日は課業は午前中だけで、午後には全生徒が運動場に集合して合併の体操をするのであつた。体操そのものは極めて樂なものであつたが、合併体操のある前には必ず服裝検査が行はれた。それは嚴格な検査と云ふより、寧ろ苛酷な検査であつた。鐘の合圖で生徒が規定の服裝をして集合すると、級主任が來て先頭から一人一人、帽子、上衣、下衣、ゲートル、靴——といふ順序で嚴密に取調べるのであつた。帽子の裏に書き付けた氏名が汗などで消れて居ると、級主任は待つてゐたと云はぬ許りに、餘り感じのよくない闇魔張を取り出して記入した。それが終ると、次に体操教師が梟のやうな眼を見張つて馬鹿丁寧な検査をした。殊に、二學期の初め、新に來た休職中尉は物凄い程嚴格であつた。生徒を全く兵卒あつかひにして、帽子の被り方を注意したり、靴の手入れの悪いのを大聲で叱聲りつけた。ゲートルの紐釦が一つでもとれてゐると、大發見でもしたやうに大聲を擧げて級主任に報告した。最後に、校長自ら出てきて、老眼鏡の裏に窪んだ雙眼を、間斷なく瞬きながら巡視することもあつた。そんな時には、生徒は皆棒のやうに衝き立つて呼吸までも凝らすといふ有様であつた。

かうした幾多の難關を無難に切り抜けた者だけが、合併体操に加はることが出來た。若し少しでも缺點が

あつて級主任の闇魔帳に記入された者は、「服補違犯者」といふ汚名のもとに列外に出されて、直立不動の姿勢をしたまゝ、合併体操を傍觀せねばならなかつた。かうして傍觀するのは一見非常に樂なやうであるが、之れを一度でも體驗した者はよく知つてゐるやうに、一時間以上も直立したまゝ、動かずに居るのは、元氣盛りの生徒でも可成りの苦痛であつた。それに、唯之れだけでは濟まなかつた。合併体操が終つて生徒が皆歸つた後で、違犯者達は運動場の隅に集められて、校長から耳の痛い戒告を聽かされた。校長の説諭は一時間以上も續くのが常であつた。その間、違犯者達は腰掛けることも出來ず、体操傍觀の際、酷使した兩足を更に鞭撻しなければならなかつた。初めの間は校長の儼然たる態度に氣を吞まれて心が緊張してゐるので、兎も角も我慢が出來たが、段々時間が経つにつれて、足の過勞が總ての神經を奪つていつて、空虚になつた脳に眩暈を感じる事もあつた。かうした苦しい目に遭つて説諭を聽く生徒は、時に依つて變つてゐたけれども校長の戒告は概して異らなかつた。「……今日、君達を服補違犯者として説諭することは、吾輩の甚だ遺憾とする所である——君達は一体に服裝位はどうでもいゝと思つてゐるかも知れぬが、それは大いなる誤解である。凡そ何事でも、その外形と内質とが密接なる關係を有してゐるやうに、服裝の如何は君達の内面に大なる影響を及すものである。服裝を整然として居ないと心は自ら弛んでくる。之れは心に弛みがあるから、服裝が整然としなないと云ひ得るが、兎に角、服裝を整へることは品性の向上に與つて力がある。殊に、君達は修養の中途にあるのだから、此の點に一層の注意を拂はなければならぬ。我が國は古來世界稀に見るの君子國で非常に禮儀を重んずる所である。従つて服裝などは極めて嚴重で、昔の武士などは頭の頂から足の先まで、何一つとして忽にしなかつた。此の風潮は、猶今日までも傳つて、實に我が國の精華を成して居る。

君達は此の比類なき君子國、禮讓を以つて大なる誇とする國に生れながら、こんな様子では辱しくはないか——吾輩は本校を以つて縣下第一の模範學校に爲さうと、日夜心を痛めて居るのに、君達は少しも學校の命令を守らない。一体どうしたら君達は吾輩の言に従ふのか……だが、過失も改むるに越したことは無い今度迄は許してやるから、此の次からは充分注意せねばならぬ……」。

啓造は之れまで、さうした苦しい經驗を幾度も嘗めて居た。服裝検査の時に、所屬學年を示す襟章を、白の繪の具で書いてゐて、級主任から、ひどい叱責を喰つたこともあつた。兵式体操の時間に、破れた靴を穿いてゐて、休職中尉から、列外に突き飛ばされた事もあつた。また、冬の寒い日に、彼の父が村役場に勤めてゐた頃、着古した安メリトンの洋服を着てゐるのを發見されて、教員室に呼ばれたこともあつた。かうして、啓造は遂に「前科者」といふ名までつけられて、學校當局の注意人物になつてゐた。

啓造は毎時間教科書を凝平見詰めて、殊勝げに講義を聽いて居たが、それからそれへと、まるで盛夏の雲のやうに湧いて来る過去の恐ろしい幻想に襲はれて、少しも落ち着けなかつた。彼は十分の休憩時間には、あちらこちらを駆け巡つて、行人の喜捨を求むる憐れな乞食のやうな様子をして、會ふ人毎に靴とゲートルとの調達を嘆願した。が、それは結局悲惨な芝居に終つた。「さあーどうもね……」と機械的に頭を傾けるばかりで、誰も眞面目にとり合つてくれる者は無かつた。彼は瑣々たる慰めの言葉や表情を吝む人々の冷淡さを心から情なく思つた。一方には、また、他人の誰もが皆愉快さうに談笑したり飛び歩いたりして居る中に、唯獨り眼前の小さい問題に蕉立つて、譯もなく、他人に憐を乞ふたり怨んだんして居る自分を嘲りもし

た。

最後の時間には、級主任の課業があつた。「皆も承知の通り、今日、合併体操と服装検査とがある筈である。今更改めて言ふ程でも無いが、從來此の級には、服装違犯者の数が多いやうであつたから、今度は充分注意して欲しい、陳腐な言だが『起つ鳥あとを濁さず』と云ふことがある。諸君も、やがて、此の學校を去るのだから、最後になつて悪い印象を残さないやうにして貰ひたい……」生徒の出缺を調べ終ると、級主任は可成り雄辯にかう云つた。啓造は自分の事を云はれて居るやうな氣がして不快でならなかつたので、故意に、額を背けて窓の方を見やうとした。と、意味ありげな微笑を湛へた岡本の皮肉な顔にぶつつかつた。彼は慌てて視線を反した。

課業が終ると、生徒達は、みんな、爽快な外氣に吸ひ込まれるやうに出て行つた。啓造は一人教室に居残つて辨當を開いたが、いつものやうないい味はしなかつた。彼は箸を横に置いて、無數に重り合つた飯粒の白い表面を凝^{じり}眺め入つた。すると、乳白の飯粒の一つ一つが二重に見え三重に見えて、遂に彼の網膜から消えていつた。と同時に、雙方の眼瞼が名狀し難い快さのうちに、次第に力なく弛^たんでいつた。暫くすると灰色に化した視野に銀色の靴が現れた。それは驪^りて赤靴に變り、次に黒靴になつた。そして、今まで一つであつたのが、段々増して丁度風の強い晴れた夜の星影のやうに暗緑の中に絶えず明滅した。

「高津さんー」といふ突然の叫び聲に驚かされて、啓造は眼を見開いてあたりを見廻した。すぐ傍に知り合ひの下級生が立つてゐた。

「高津さん、随分吞氣ですね、辨當を食ひながら居眠りなんかして——所で、此の靴はどうでせう？」その

生徒はかう云ひながら大きな靴を差し出した。

「何？靴？」啓造は餘り思ひがけない事なので、それは自分が今まで思ひ詰めて居た靴が、そのまま夢の中から抜け出てきたのでは無いかとさへ思つた。が、手にとつてよく視ると、それは矢張り現實の靴に相違なかつた。而かも、それは兵隊の古靴を更に穿き古したもので、靴と云ふ名稱を與ふるには餘りに變形して居た。どんなに最負眼に見ても嚴重な檢査に通過する望はなかつた。

「さうだね、これちや折角だけれど……」啓造は、わざわざ持つ來てくれたその下級生の親切を心から感謝しながらも、さう云つて返さない譯にはゆかなかつた。

「どうでもなれ——何もかも自業自得だ。此の上は、甘んじて罰を受けるまでさ……」啓造は吐き出すやうに呟いて教室を出た。かう諦めると、今迄彼の頭にこんがらつて居た焦燥や懊惱が一時に消えて、まるで夕立の過ぎた後のやうに晴々しくなつた。彼は成るだけ人目に觸れないやうにして植物園に遁れて行つた。草も木も地面も、すっかり裸体になつて、目もあてられぬ程荒廢して居たが、植物園の何處にも、聽て、春を迎へて新しい活動に取り掛かうとする半ば目覺めた生命の微かな呼吸が潜んでゐた。

啓造は寒い風を受けない草原の窪みに身を横へた。

「學校なんか、どうでもいいや、」と彼は獨り呟いた。「兎も角も、此處さへ卒業したら南米に行くのだ。南米へ……」

彼はブラジルに居る綾部から來た手紙を取り出して、そつと開いた。

「懐しい故國の啓造様——お別れしてから、もう大變久しくなりましたが、お變りはありませんか、私は毎日、強い日の光りを浴びて健かに働いて居ます。朝まで日が昇らぬうちに家を出て、限りなく續いた珈琲樹の畑で働きます、晝食の後には、大低、滴る緑の樹蔭に寝ころんで休みます。こんな時には、よく、此の邊りで遊んで居る土人の小供等を見かけます。初めのうちは、彼等は珍奇なものでも發見したやうに、私達を遠くから眺めて居ましたが、比頃は、もうすっかり友達になつて、通せぬ言葉を手眞似で補ひながら樂しく遊びます。此の子供等の中で一番大きいのが、時々、名も知らぬ樂器を持つて來て、此の土地の民謡らしい唱を弾いて聞かせます。その時には、他の小供等は樂器に和して歌つたり、みんなで輪を作つて裡はだか踊りをしたりします。大きな眞紅の太陽が西の地平線に沈む頃、私は仕事を終へて歸ります。此の土地では、見るもの聞くもの、みんな珍しいものばかりです。だけど、私は何だか寂しくてなりません。あなたと共に樂しく遊んだあの頃の事が……………」

如何にも少年らしい文字の連りを恍惚として辿つてゐた啓造は此處まで讀んでくると深い嘆息を洩して虚空を仰いだ。すると、默想的な冷たい藍色の深みから、大きい濕んだ眼の中に、あどけない光をいつぱい漂はした綾部の面影が、憧れに燃ゆる啓造の瞳に映じてきた。やがて、その柔い唇が微かに顫へて何となく淋しい陰影を含んだ微笑が肉附のいゝ顔一面に波打つたかと思ふと、不意に、強烈な日光、紺碧の空、蒸し返る深緑、アルバカ、裸体の土人——などが、一つ一つ綾部の幻影の背景を爲して、フィルムフィルムのやうに馳け巡つていった……………

併し、その疊惑的な幻想は、餘り永く續かないうちに、近づいて來る人の聲音でぶツつり、斷ち切られてし

まつた。——彼は開いた封書を手早く衣囊^{ボケツツ}に衝き込んだ。

「おい！高津、こんな所に居たのか？随分搜したよ」と、岡本は幾らか呼吸を喘ぎながら草原に腰を下した。啓造は此の突然の闖入者の姿を見ると、不快になって口を開かなかつた。

「どうした、靴は？誰か借してくれたかい？」

「駄目だ——僕はもうすっかり断念したよ」と、啓造は煩さうな顔をして云つた。

「さう氣短かに覺悟を定めなくてもいいよ。」と云ひながら鳥渡時計を見て、「まだ三十分もあるから充分用意は出来る——實は僕にいい考があるんだがねえ？」岡本は如何にも相手の心を唆り立てるやうな音聲と表情とでかう云つた。

「ね？一体どんな事？」啓造は殆ど夢中になつて岡本の顔を覗き込んだ。あれ程決心した諦めか如何してこんなに脆く壞れたのか、彼自身にも疑問であつた。

「之れは大きな聲では云へないがねえ——小使室の横に倉庫があるだらう、あの中を搜して見給へ。生徒が置き忘れて没集された靴やゲートルが、きつとあるから」

「それは勝手に採つてもいいのかい？」

「無論いけないよ。だけど、虎穴に入らすれば虎兇を得ずさ、何しろ、峻嚴な検査を誤魔化さうとするのだから、此の位の冒險は當然だよ」

「ちや、ともかく行つてみやう」と云つて啓造は急いで立ち上つた。

小使室の横に行くと、岡本が云つた如く古い倉庫があつた。啓造は倉庫の傍に立つたまま、暫く躊躇して

居たが、邊りに誰も居ないのを見ると、人家に忍び込む盜人のやうに全身の各部に落度なく武裝を施して、重い戸を靜かに開けて中に入つた。明るみから急に暗闇に入つたので全然眼が利かなかつた。併し、その暗黒はともすれば閃き出さうとする良心の輝きを曇らすのに却つて都合がよかつた。彼は眼前に凝つてゐる濃い闇の魄を、鼻のやうに見詰めながら大膽に進んでゆつた。物に觸れる毎に、彼は手の觸感で辨別した。僅かの光線を洩してゐる高い窓から、時々、運動場で騒ぐ生徒の雜音が流れ込んで來て彼の鼓膜を衝き刺した。その度毎に、啓造は抵抗し難い焦燥と恐怖とに驅られて、狂氣のやうに暗闇を駈け廻つた。そのうちに、眼が闇に馴れて雜然と玆んだ種々な器具が朦朧と浮んできた。幾度か苦しい恐ろしい目に會つた後、彼は辛じて一足の下駄、靴を見出した。此の上、靴を得たい執念は去らなかつたけれども、その時には、もうそれだけの勇氣は全く無かつた。

「濟まないが、針と糸を借してくれないか？」外光の眩しさに眼瞼を瞬きながら、啓造は小使室の戸口に腰を下した。

「何になさるのだすかい？」と、中から小使が云つた。

「いや、鳥渡——ゲートルが少し小いから鈕釦を付け換へようと思ふ」

彼は小使から針と糸を受取つて鈕釦を付け初めた。熱心に針を運びながらも、頭は時々靴の方に走つた。

「まあ、ゲートルがあるから、せめて……」色々と思ひ悩んだ末、最早や靴を得る手段の盡きたのを知つて、かう諦めねばならなかつた。

啓造が自分で繕つた古ゲートルを持つて、小使室を出ようとする時であつた。

「寅吉さん(小使の名)、宮田先生が合併体操の旗を出してくれと言ひましたばい」と云ふ大聲と共に、反對の戸口から給仕が入つて來た。啓造は何の氣もなくふり返つて給仕に軽い一瞥を與へたが、或る物が突如彼の瞳を射るやうに映じた瞬間、弛るんでゐた隻眼が異様に燃え上つた。

「靴だ！靴だ！」と彼の心は叫んだ、「あの靴さへあつたら、俺はもう完全に通過することが出来る。あの靴をほんの暫らく貸してくれたら……」。

が、啓造が給仕の顔を見上げた時、憎惡と不快の念とが絡み合つて鳥影のやうに彼の胸を横ぎつた。啓造は之れ迄給仕に會ふ度毎に、名狀し難い嫌惡の情を感じた。給仕の顔を思ひ出すのさへ、唯譯もなく腹立しくなつた。それは彼の力では制し切れないある不可抗的な力であつた。併し、別に争つた事もなく、言葉さへも交したことも無い給仕に對して、之れ程憎しみを懷くのに、かうした譯があつた——。

丁度一年前の事であつた。その時迄、永く勤めて居た給仕が職を止めて、その代りに綾部といふ十二三の少年が新に給仕として來た。綾部は特に美しいと云ふ程の少年ではなかつたが、始終微笑を湛へた黒瞳勝な大きな眼と、かうした階級の者には稀らしい程眞純な無邪氣さが、その頃孤獨に惱んでゐた啓造の心を強く牽いた。——二人は何時しか仲のよい友達になつた。放課後などはよく連れだつて、學校の邊を散歩したり、魚釣りに出掛けたりした。時には學校の植物園のクローバーの上に寝そべつて、他愛もない話に時の過ぎゆくのを忘れることもあつた。

かうして、彼と綾部との關係は次第に深く濃くなつて、遂に二つの魂の間には單なる友情よりも、もつ

と魅惑的な情愛が潜むやうになつた。啓造は一日でも綾部を見ないと堪らなく寂しかつた。綾部の居ない所は何處にも空虚と寂寥とが充ち満ちて居るやうにさへ思はれた。それで、單調で無味な課業には少しの興味も感じなかつたけれど、學校を休む事は殆ど無かつた。

「君は綾部に随分御熱心だと云ふ評判だが、同性の愛とか云ふものゝ甘味は一体どんなもんかい?」「何しろ、少年に耽溺するのは何處まで行つても至極無難でいゝね、アハハ……」などゝ、友達から揶揄はれると、啓造は耳朶までも赤くしたが、それでも内心には云ひ知れぬ幸福を感じて居た。

その綾部が、どうしたのか十月からばつたり學校に姿を見せなかつた。啓造は彼が病氣になつたのではないかと心配して小使に聞いてみた。すると意外にも、綾部は數日前父親と共に南米のブラジルに渡航したとの事であつた。啓造は、唯一言の挨拶も残さずに立ち去つた綾部の素氣無さが怨しかつた。けれども、それは飛び去つた鳥の跡を追ふやうなもので、どうする事も出来なかつた。彼は戀人に捨てられた一本氣の青年のやうに、憤懣と空虚と寂寥とに苛^{さいなま}れながら日を送つた。

それは秋も暮れて寒さが身に染^しむ頃であつた。何かの課業時間中に、見慣れぬ一人の少年が入口の扉を怖る恐る開けて入つて來た。持つて來た通知簿を教師に渡すと、その少年は垢の滲んだ小倉服に包んだばかり切れさうな肉體を、所在無さうに搖つて居たが、時々、蒼白く脹れ上つた面炮^{にきび}だらけの顔を生徒の方に向けて、物稀らしさうに象のやうな眼を見張つた。

啓造は一見してそれが綾部の代りに來た給仕であることを知つた。と同時に、彼の心は一時に燈が消れたやうに眞暗闇になつた。啓造は綾部を失つてからの淋しい間にも、新に來る給仕の幻影を心に描いて自分を

慰めて居た。それが遂には一つの美しい偶像になつて、彼の心に深く刻み付けられてゐた。所が、その實體は築き上げた偶像とは似もつかぬもので、彼の幻想は根柢から覆されてしまつた。

「あんな野郎か……」と啓造は苦々しく呟いた。そして、彼は曾つて綾部から受けた憤懣や絶望、それに新來の給仕に對する幻影破滅の失望や憂哀などを、一つの大きな憎しみに固めて此の給仕の外貌の醜さに投げつけた。

「どうだい？高津、今度の給仕は莫迦にいつ少年ぢやないか？」と、皮肉られても、苦笑する勇氣さへなかつた。――啓造が給仕を毛蟲の如く嫌ふのは、それからであつた。……

その給仕が今、彼の眼前に立つて居る。そして、その給仕は彼が如何しても得たいと希ふ靴を穿いて居る――得體の知れぬ葛藤が啓造の頭の中に暫く續いた。けれども、既往の嫌惡は矢張り現在の利害には勝てなかつた。

「おい君……どうかその靴を僕に貸してくれないか？」と啓造は思ひ切つて言つた。その聲は彼自身にも妙に思はれる程唐突たるものであつた。

「何ッ？、わしの靴を？」給仕は不意の依頼に驚いて、象のやうな眼を見張りながら、小倉服の下から這ひ出た赤靴と啓造の顔とを交る／＼眺めた。

「服装検査があるのだが、靴が無くて弱つてゐるから、どうか貸してくれよ」

「……………」給仕は何とも答へないで、唯如何にも困つたといふ表情を浮べて、凝乎靴を見詰めた。

「ねえ、貸しておくれよ、」啓造は執拗く哀願した。

「服制検査なら、赤靴は駄目ですばい。」

「いや、大丈夫だ。此處に靴墨があるから、之れを借りて塗るから——ねね、頼むよ。」

「そんなら貸しますけんぞ、わしの靴なぞ、云つちやあ、いきまッせんばい。」給仕は暫く考へて居たが、遂にかう云つて承諾した。

「うん、大丈夫だ、大丈夫だ」かう云ひながら、啓造は給仕の脱いだ赤靴を手に取つて、眞黒な靴墨を遠慮なく塗りつけた。瞬く間に赤靴は黒靴に假装した。給仕はこの有様を惜しいやうな怨しいやうな顔をして眺めて居たが、何とも言はなかつた。

「もう之れで立派なものだ」と啓造は獨り言のやうに云つて靴を穿かうとした。が、靴が少さくて穿けなかつた。彼は今まで靴を借る事にのみ熱中してゐて、給仕の靴の小さいのには全く氣が付かなかつた。

此の時、折悪く集合の鐘が鳴り響いた。啓造は狼狽して紐を出來だけ弛めてみたが駄目であつた。靴から紐を抜き取つてみたが、矢張り駄目だつた。實際どう考へても、「百姓足」と綽名をつけられて居る彼の巨傲な足は、此の上品な靴に入る筈は無かつた。啓造は之れまで、級の生徒から「百姓足」「下駄屋泣かせ」など、冷評ひやかされたり、黒板に自分の巨足の漫畫が描かれたりしても、自分の足の大きいのを、一度でも嗟嘆した事はなかつた。が、此の時は、凝じつ平床に蹲つた兩足を視詰めて思はず深い嘆息を洩した。次に彼は役立ない靴に眼を落して、苦り切つた顔をして考へ込んだ。それでも、之れ迄、可成り貴い代價を拂つて購つた靴を、その儘捨てる事は出來なかつた。それに、切迫した時間が少しの躊躇も許さなかつた。

「どうにかならあ！」啓造は全く大膽になつて立ち上つた。

啓造が靴を手を下げて運動場に出た時には、もう生徒達は整然と列を組んで居た。が、幸にも教師はまだ一人も来て居なかつた。彼は急いで列中に割り込んで、靴を足許に置いた。そして、邊の生徒に氣取られぬやうに、足許が氣にならなから、故意と靴から視線を背けて遠方を眺めた。

「やあ、高津……また、例の速席料理か、それにしても今日は莫迦にうまく出来たぢやないか、」眼捷く認めた一人がかう云つた。

「なぜ靴を穿かない？、足に肉刺でも出来たのかい？」他の一人が親切とも皮肉ともつかぬ語調で、かう訊いた。

「いや、別に……」と、啓造は語尾を濁して苦笑した。そして、てれ隠しに靴を引きよせて足の先に衝きかけた。

「穿くも穿かぬも無いぢやないか、まあ、あれを見給へ、巨人の足に侏儒の靴——全く何とも云へない對照だね、」今まで、黙つてゐた岡本が顔を差し出して聲高にかう云つた。邊の生徒等は啓造の足と靴とを等分に眺めながら、どつと笑ひ崩れた。啓造は哀願するやうな眸を岡本に注いだ、彼は友達が面白さうに笑ひ興じ、それが爲めに啓造が少からず狼狽するのを見ると、益々有頂天になつていつた。

「ねえ諸君……必要は發明の母なりと云ふ箴言があるが、必要は無謀の父なりと云ふ事も全く眞理だね——見給へ、必要なるものは、平生、他人の顔をも正視し得ない程の小心の徒を驅つて、大膽にも公共の建物に侵入して窃盜を爲さしめ、加ふるに、靴の厚化粧をも敢て爲さしめたではないか……」岡本は得意の演説口調で喋り續けた。そして、「速席料理のうまさも、かう種が解れば案外まづいもんだね」と附け加へて皆を見渡

した。謹聽して居た生徒等は拍手さへ交へて再び笑ひ崩れた。啓造は益々狼狽するのみであつた。

「おい、來たぞ、來たぞ、」暫くすると、生徒の一人が級主任の姿を見付けて、かう叫んで注意した。今まで、笑ひ興じてゐた生徒達は急に先の沈黙にかへつて端然と整列した。之れを見ると啓造は、半ば夢中に半ば自棄氣味になつて、力任せに足を靴の中に衝き込んだ。その拍子に横廣く竝んだ五本の足指が重り合ふやうになつて小さい靴の中に喰ひ入つた。それでも、憎らしい程大きい踵だけは矢張り靴の踵の上から突き出てゐた。それはもう、どうする事も出来なかつた。彼は鳥渡の間考へて居たが、何か思ひ當ると急に前屈みになつて、ゲートルを出來るだけ下に落して、靴と露出した足との限界の見えないやうに蔽ひ被せた。そして、ゲートルの皮紐を靴の下腹に結び付けると、足指の痛さを忍んで踵を靴の上にのせた儘直立した。

「それでは、今から服裝検査を行います」と、級主任は生徒一同を見渡した後、嚴かに言ひ渡して衣囊から閻魔帳を取り出した。

他の生徒等が検査を受けて居る間、啓造は小さい靴の中に壓しつけられてゐる足指の痛さに堪へかねて、幾度も足を前に差し延したり、靴先きを揺り動かした。そして苦痛を忘れやうとした。それでも、級主任が近づいて來ると、次第に氣味の悪い緊張に縛られて、正面を直視した彼の視野に級主任の神経質の顔が微かに反映した時には、足指の苦痛などは全く消えて、別な恐怖で全身が自ら戰慄した。彼は氣を取り直して、下腹にぐつと力を入れて身体の微動を静止しようとしたが、身体はそれが爲めに却つて振動し初めた。それは恰かも、振動する糸を静止させるために力強く引つ張るとき、却つてその力の反動で糸が微動するのに異ならなかつた。

そのうちに、級主任は啓造の正面に來た。啓造は級主任の顔を正視することが出來ずに遠い一點を見詰めて居たが、帽子から上衣、下衣から下衣——へ流れて行く主任の鋭い視線を、針で刺されるやうに痛く感じた。そして、その鋭利な視線が、足許でびつたり止つた時、彼の全身は石のやうに堅くなつた。啓造はもう前面を見る勇氣が無くて、靜かに雙眼を閉ぢた。「……スッパリやつて、おくんなツせわ……」激憤に狂つた武士に追ひ詰められて逃路を失つた町人が、かうした齒切れのいゝ臺詞^{せいご}を残して、衝きつけられた白刃の下に身を投げ出して瞑目したその瞬間の心情——それは「どうでもなれ」といふ絶望的な諦と、「此の男らしい覺悟に免じてどうか許してくれ」といふ人間的な執念とが絡み合つたある悲壯な心情——是れが、その時の啓造の氣持であつた。

彼が再び眼を開いた時には、級主任はもう面前に居なかつた。彼は深い緊張から解かれて、はつと吐息を洩らした。が、それもほんの僅かの間であつた。その時にはもう梟のやうな眼を見張つた休職中尉が彼の近くに居た。啓造は再び全身に防禦の備を施した。併し、それは前とは全然同じではなかつた。極度に緊張しながらも、心の何處かに級主任から無難に脱れ得た一種の快感が波打つてゐた。

「おい……お前は踵のあたりが變に見るが、どうして靴を正規通りに穿んのか？」中尉の太い低音の呟鳴り聲が、啓造の胸をぎつくり刺した。「此の中尉に見付けられては逆も駄目だ。正直に何もかも云つちまへ……」と、或るものが心に叫んだ。と同時に、「今まで死ぬやうな苦しみをして來たのぢやないか、もう暫しだ、我慢しろ……」と叫ぶものがあつた。

「……」啓造は項低れて何とも答へなかつた。

「どうして正規通りに穿かんのか？」と、中尉は再び嘔鳴つた。

「……………」啓造は頑固に口を噤んで居た。底知れぬ悽愴な沈黙が暫く続いた。

「靴が小さいのか？」さう云ひながら、中尉は靴とゲートルとの切れ目から僅かに覗き出した踵の邊りを見詰めてゐたが、「矢張り靴が小さいやうぢやな」と獨り言のやうに云つて、

「何處で製つたかい？」啓造の顔を覗き込んでかう訊いた。

「古町の角の靴屋です」と、啓造は相手の言葉の意外のやさしさに釣込まれて出任かせに答へた。

「さうか、これは靴屋に直して貰はんといかん。今日は之れで仕方は無いが——」と、云ひ残して中尉は先に進んだ。

「助かつた！」さういふ言が、その時突然啓造の唇に振へた。總ての武装から全く解除されて、啓造は何の蟠も無い安易な心で邊りを見廻した。それは僅かな時間の隔りではあつたけれども、丁度苦しい試験を終へて郊外を散歩する時のやうに、眼に映するあらゆる事象が全く變つて見えた。彼は内心に漲る安泰を人や建物や樹や空に投げかけて、それ等の物から譬やうの無いある快さを享樂して、検査場に立つてゐる自分を全く忘れてゐた。

が、漫然と彷徨して居た彼の視線が生徒の列外に落ちた時、啓造ははつとして我にかへつた。其處には、心配さうな顔をした給仕が衝き立つてゐた。啓造の心は急に暗くなつた。恐怖とも憎惡ともつかぬ不安が雲のやうに湧いてきた。給仕は貸した靴を心配して居るのだらうか、それとも、俺の検査を憂慮して見に来たのだらうかと啓造は考へた。彼は強いてそれを善意に解さうとしたが、現在給仕が立つて居るのを見ると、矢張

り不快でならなかつた。一人の給仕が彼の傍近く居るのが何故に不安なのか、靴を借りた恩人の存在がそれ程呪はしいのか、啓造は自分で自分の心を疑つてみた。が、それでも、彼は給仕が其處から一時も早く立ち去つてくれ、ばい、と、唯そればかり希つた。そのうちに合併体操が初つた。啓造は服裝検査の事などはもうすっかり忘れて、敏活に手を舉げたり、飛んだり跳ねたりした。

体操が終ると、生徒達はまるで蜘蛛の子を散らしたやうに入り亂れながら消へ去つた。啓造は唯一人になると、靴を下げて歩き出した。その時、永い喧噪から静りかへつた運動場の空氣を搖るがせて、壓しつけるやうな聲が聞えた。彼は驚いて聲の方向を眺めた。すると、運動場の片隅に十三人の生徒が、一様に頭を項低れて立つて居た。小高い所に立つて居る校長は、頻りに手を振り動かしながら熱心に何か説いて居た。啓造は直に、それが服裝違犯者の群である事を知つた。彼は猶も瞳を凝らしてそれを眺めた。そして、自分も度々此の群に加はつたことを思ひ浮べて、不幸な違犯者達に、せめて自分だけでも暖い情を持ち度いと思つた。が、不思議にもその時には惻隱の情らしいものは少しも湧いて來なかつた。いや、それ所ではなかつた。兎も角も検査から遁れて自由な位置にあつた彼の心には、此の違犯者に對して嘲笑や侮蔑の念すら起つたのであつた。

「憐れな奴共だ……」啓造は冷やかな笑を浮べながら、踵を廻して大股に足を運んだ。化學教室の傍まで行くど、淡暗い樹蔭から給仕が出て來た。

「検査には通りましたかい？」と、小走りに近づきながら給仕は尋ねた。

「うん、萬事うまくゆつたよ」啓造は快活にさう答へた。

「そりやあ、よかつたですなあ、わしはごうも心配で心配で堪らず小使室にじつとして居りきりまッせんやつたけん、あんたの傍まで行つて見て居ましたばい。あの体操の先生があんたの靴を見咎めたでッせう、あんな時にや、わしははたから見てもひや／＼しましたけん、あ、給仕は、その時の自分の氣持を一層鮮明に示すかのやうに、象のやうな腫を見張つたり鬚毛の頭を振り動かしたりして、かう云つた。

「さうだつたか?」と、啓造は何氣なく云つて笑つたが、そんなに迄してくれた給仕に對して、何だか非常に濟まない事をしたやうな氣がして苦しかつた。

「それにしても、あんたが検査にうまく通りましたけん、わしも靴の貸し甲斐がありましたたい、」と云つて給仕は蒼く脹れた兩頬に如何にも嬉しさうな微笑を湛へた。啓造は今迄、之れ程快活になつた給仕を見たことは無かつた。で、物稀らしく彼の顔を眺めた。面炮だらけの醜い頬に微笑を漂した給仕の笑顔は、見たところ、餘り感じのいいものでは無かつたが、啓造は何となく心を牽かれた。彼は猶もその笑顔を見詰めた。すると、給仕に對する憐憫に似た暖い情が次第に湧いて來るのを感じた。そして、彼は外貌の醜さといふくだらぬ理由から、無下に給仕を侮蔑してゐた自分を悔ひさへした。

が、人知れぬ苦難に堪へ忍んで峻酷な服裝検査から遁れた得體の知れぬ歡喜と誇りは、彼が給仕に對する感謝にのみ没入することを許さなかつた。

「……あんな風だつたから、何しろ僕も一時は心配したよ、——あの級主任が僕の足許を見詰めた時や、体操の先生が踵の出てゐるのを見咎めた時なんか、全く生きた氣持はしなかつたね。それでも、いゝ加減に見逃してくれたから有難かつた。級主任や中尉なんか見たところ非常に恐いやうだが、あれで案外人がいゝん

だよ、——其處にゆくと、どう見ても僕の方が一枚役者が上だね……」と、啓造は何もかも唯感心して聽いてゐる給仕に向つて、得意な語調で喋り續けた。此の時の彼の心には悔恨もなければ自責もなかつた。唯もう、彼の頭は検査に通過した歡喜でいっぱいになつて、自分の爲した行爲を省る餘裕は全くなかつた。之れ迄、永い間自分を苦しめた姑息な學校當局を、最後の場面で——それは堂々とした正面攻撃では無かつたにせよ——俄か仕込みの安芝居で、兎も角も誤魔化し抜いたかと思ふと、啓造の全身は或る快感に打ち震へた。彼は威壓的で冷嚴な校長や、頑迷な休職中尉や、陰險な岡本などの顔を一つ一つ思ひ浮べて、彼等に對する堪へ難い憎惡から、ある皮肉な反語的アイロニカルな快さを享樂しようとした。が、不思議にも、検査の終る迄はあれ程怖しかつたあれ程憎かつた彼等の姿が、今は乾枯びたむしろ憐むべき個個の偶像となつて、彼の面前に浮んできた。

「此の靴墨はよう、これまッせんせ、」啓造から受取つた靴を紙片で擦つてゐた給仕は、突然訴へるやうにかう云つた。

「それは困つたね——だが、今日の検査で黒靴として認められたのだから、その儘にして置いたらどうだい」と云つて、啓造は皮肉な微笑を湛へた。

その次の日の午後であつた、啓造は食後のゆつたりした身體を植物園の草原に横へて、例の南米熱に心を燃した。紺碧の空や裸体の土人などが、何時ものやうな魅力に満ちた光を放つて彼の頭を駈け巡つた。そして、彼の心は期せずしてブラジルに居る綾部の事に遷つていつた。總てが強烈な色彩を帯びた南の國で愛人

に巡り遭ふ——さうした浪漫的な場面を想像して、獨り心を躍らしたりした。

「高津さんちうのは、あんたですかい？」といふ突然の聲と共に、小使が木立の中から首を出した。

「うん、僕だが、何か用かい？」啓造は立ち上りながらさう云つた。

「あゝ、さうだしたかい、あのう、主任の先生が一寸來て下さいといつてですばい、」と云つて小使は立ち去つた。「うん、すぐ行くよ」と、啓造は平靜な顔でさう云つたが、次第に昂まる心臓の鼓動を抑へることは出来なかつた。級主任が何のために呼ぶのか、啓造には白紙のやうに明にわかつてゐた。彼は重い足を運んで教員室の方に行つた。

「君を呼んだのは、別ではないがね」と、級主任は啓造の姿を見ると、かう口を切つた。「實は、昨日の服裝検査の事だが、——君が今度何の缺點もなく通過してくれたので僕も非常に嬉しかつた。級主任として、その級から一人でも違犯者を出すのは、實に不名譽だからね。今度は君が眞面目にやつてくれたので、我が級には一人の異犯者も無かつた。校長先生も非常に喜んで居たよ。君だつてやれば何も出来ない事はないのだ。今度の検査がそれを充分証明して居る。卒業後、進んで高等の學校に入るにせよ、直に實業に就くにせよ、此の精神でやつて貰ひ度い——それにしても、君が眞面目になつてくれたので僕は嬉しい。君とても、永く居た此の學校に悪い印象を残さずに去るのは愉快な事に相違ない……」

熱心に説く級主任の忠告を、造啓は黙々として聽いて居たが、此の時ふと、「起つ鳥あとを濁さず」と、前の日、級主任が云つたあの諺言を思ひ出して、燃え上る頬を兩手で蔽つた。(大正九年五月)